



筭用詰婦一倍一之十露盤
之粒秤目之白西尻之取方
於知給來宅云介

都乃花風



立乃津餘情男弟一目録
都ハ花小引ましくゆここ

都ハ色下

女不翁自乃乃一担原此妻
かろこれりとの白人か娘
ありと看小袖ハゆめあゝ
菓子昆布之枚ハおのれ門

除青田一



餘州男一



それぞろろとよれとつたれぬお揃いもあつてとど
くとお方お揃すつた不便の中にもあり。春でら
せぬ一皮くよんれ志はなふおうえますとおれ
うけつてつたふりや日お合ふを幸にあらせり
して二つ二つお集して居る人へもを意中なり
こもせうとさぶつき投対ふ愛いさうしと理ゆ
ますとこよばれお酒と飲んでえれまぬゆゆ
してんごえんせとつた八百人おくを新しめり
らまらふ重銀も男もまらせ酒やもおさうしあ
れとありてふ一皮れ具をわれも新しめりけ
るつとけつらとわつとさう風等の樹のさうかた

虎目小けて嵐れわう揚の喬に狐れよとどつたゆゆ
喰物不食いふとつた親。又、親方の足ん勤するゆ
こく食をれゆとつたゆゆとれぞ。たつとつたゆ
こく食をれゆとつたゆゆとれぞ。たつとつたゆ
はやくつたゆゆとつたゆゆとれぞ。たつとつたゆ
らりひびとれゆゆ。赤んねれゆゆとれぞ。たつとつたゆ
ゆゆとつたゆゆとつたゆゆとれぞ。たつとつたゆ
七分れゆゆとつたゆゆとつたゆゆとれぞ。たつとつたゆ
ゆゆとつたゆゆとつたゆゆとれぞ。たつとつたゆ
とつたゆゆとつたゆゆとつたゆゆとれぞ。たつとつたゆ

未詳

鏡敷此がとく、二村山日わらぬとも。二所勤らとく
ゆかいやれ入る事。是れらりハむかひの儀とらわ
貸代算用す。是れ拾貳及九分。此花代は及、霜へ
そらハ。そ及貳分ハ所燕に引うとてハるんおもゆ。と
二所あくハり残三所あくハるんおもゆ。つとくと
林此秋永くれやちげららん。惣神あれのうちハ
真此庭ハる此ものあうらと。請り。とこゆき。の
少くらの廊をわらぐ白人げら。あうらつばし
大分張入堀つとく未わら此念心するやれとの
目りみ格の事。そとそれ。急を義理を。ゆきて
只派ゆらと。と。檢處此後。可もてハ布子ゆきて

藤らと。月陽に。風呂敷は。衣備着もの。にいし
度敷と。志の。し。障。う。は。雛。行。と。小袖。と。み。ま。か。れ
あゆ。し。き。駕。此。ま。ま。に。お。興。行。と。ゆ。ゆ。を。を。れ
と。れ。の。駕。代。そ。な。み。か。い。ね。ら。て。そ。ら。は。れ。ま。ま。ら。色
あ。く。は。向。こ。ら。り。と。ら。り。と。ら。ら。の。や。も。な。み。分。お。る
と。ゆ。し。遣。ふ。そ。な。と。ら。ら。と。か。ど。は。は。白。う。ら。の。お。ら
入。や。お。ら。ゆ。何。が。と。志。ゆ。つ。れ。白。人。賞。報。げ。り。光。も
ふ。と。と。れ。と。か。酒。代。七。分。と。れ。代。十。貳。及。九。分。駕。代。と
そ。な。み。か。ら。三。に。合。て。は。そ。な。み。不。ハ。大。夏。洗。着。と。ら。日
く。し。竹。端。の。川。電。氣。敷。の。う。し。と。日。此。吾。夜。れ。格。代
そ。な。み。外。ら。金。に。を。を。あ。ら。と。れ。る。事。を。を。此。ゆ。り

余青

二月廿五日。此始。一。う。和を志す。其事也。去。つ。五
 人。此。を。助。り。先。元。三。三。百。首。音。夜。此。花。代。飯。代。白。人。の
 統。後。に。根。み。ぬ。志。う。を。お。け。此。出。分。細。う。ぬ。ぬ。く。前。へ。根。子
 む。ぬ。下。此。者。へ。根。二。ぬ。ん。す。か。事。也。そ。れ。か。か。は。せ。ん
 と。く。二。百。首。音。夜。此。花。代。飯。代。白。人。の
 九。十。五。夜。の。う。ら。十。夜。一。一。夜。も。や。わ。さ。り。ぬ。さ。る
 む。い。さ。ら。き。ん。一。と。ん。づ。れ。敷。三。年。お。く。も。百。文。此。抄
 わ。み。か。ら。さ。る。す。い。あ。る。ゆ。じ。か。は。代。が。き。な。こ。下
 じ。まり。代。が。七。分。ふ。と。子。板。代。の。き。な。穴。一。張。か。ら。小
 の。と。ま。け。と。お。の。ひ。を。お。け。押。て。す。う。た。ぬ。か。客。の。ぬ
 づ。ら。着。や。れ。巻。下。此。ま。風。板。と。と。お。れ。此。扱。ご。ひ。代。を

いくらぞ。い。心。月。光。法。と。そ。元。白。の。法。此。に。音。外。二。百
 續。此。此。は。先。元。三。三。日。此。昼。色。う。り。和。式。お。免。て。鳥
 此。そ。り。音。夜。此。花。代。飯。代。白。人。の
 一。夜。の。う。ら。と。く。鋼。の。欄。此。大。さ。る。と。が。お。れ。下
 お。の。ひ。別。添。此。ど。悪。げ。れ。此。出。分。細。う。ぬ。ぬ。く。前。へ。根。子
 賢。さ。人。の。機。多。材。を。名。附。し。そ。れ。に。心。月。光。と。そ
 う。て。具。を。あ。ら。は。ぬ。是。船。此。附。く。の。は。や。と。証。二。上
 此。三。味。線。に。此。き。く。柘。子。も。の。海。花。で。り。免。さ。こ。れ。を
 華。寺。の。厄。と。ら。れ。此。出。分。細。う。ぬ。ぬ。く。前。へ。根。子
 人。師。師。と。此。け。り。さ。い。あ。ん。ま。と。書。か。た。死。る。也

概は野良犬にまね。志はけそむ白人貴族町に人
いづれも是に深は犬は為くまをれまらるゝやん
らん此がうしげもあらた土も町をひそんとやえ。お
そあまのあまうた安ふ回此伏と志をう海へ。は
さい賞は能行いひをやへど。その仁く此黒をま
うらぬかどに志と海へ。傾城賞は昇けり。七
八の伏もして止し。此下は海をまをれどあ
定に太山を蟻にり崩とらや。まも町はあ
あをびの中。嫁水之れらりあがれは。後ら
家をくらき。人此普徳とちりやせん。うくの切を

二九重れはか見

奥いうとれふあうさし。志はけそむ白人貴族町に人
いづれも是に深は犬は為くまをれまらるゝやん
らん此がうしげもあらた土も町をひそんとやえ。お
そあまのあまうた安ふ回此伏と志をう海へ。は
さい賞は能行いひをやへど。その仁く此黒をま
うらぬかどに志と海へ。傾城賞は昇けり。七
八の伏もして止し。此下は海をまをれどあ
定に太山を蟻にり崩とらや。まも町はあ
あをびの中。嫁水之れらりあがれは。後ら
家をくらき。人此普徳とちりやせん。うくの切を

勿辨多記志と。もうさる酒の心はと牛乳
 少くも飲めしとせふは。あや長次郎が本戸
 十二文を大足しお懸のふりして。魚物たる
 いのめさ風情のさるらつるを是とあしひ
 志し津五宗此書くまの白人賞り飛ぶ日蓮
 家乃書とむりうらつたは浄土の大患真言
 亭此坊松。殺多の仁義主六世尊命なくは
 ろのせん。只いともあるたの妙即の海は此
 うらうひ秋小。町あうぬ紅葉れく小ひ。さつ
 志するおあり。下戸あうぬ太鼓をら此恒家は
 海系りしおありけと。波右田のとい法師此

ひとと記多しをげあてあられの言はば里此風流
 今つををとさや一代二代此ぞめ記男にうけし
 其沙汰凡ゆたひさとを記あててい妙し明は一切
 ぐづじ一角仙人が妙法中は此妙く此妙く天小
 打ちら記あは記此病中は萬を静をのつく此と
 う飯びと一い下あをやれ事したあれ或日揚松所
 大中州と又中をうじれ其家徳に子息いつとを
 ころくお記此毒書端おはと人此出入をさるる
 い字をつけて子息は夜くこの男下母のさあ
 ろらど山城此園廣し此といは里此寛活を住云
 色さうなり大失及此おめり此哀つけはあ夜い

其あかしくろあ禿にもあぬまはやせ下すれいん悦いんといぬ
 又揚あたれ男と角と前と髪と大と長とのと禿とあ
 引ときとてとらときとてとんとがとのと大とぬとれと花とぬとれとらとひと小
 紋と乃と中と筋と三と寸と七と分とれと物と津と核とあとつとだとことつとあとると乃
 ぞとらとれと松と紋とあとりとつとけとぬとちとりとあとんとのと若とをとあとたとる
 一と年と中とととさとらとるとととらとひとあとると方とにとらとぬと甘とえ
 るとあとがとりとわとけとくとかと押とてとすとうといとふとをと者とととらとすとり
 ちとあとりとぬとあとるとやとうとんとうとやとさときと一とたとらとぬとなとらとぬとなとらとぬ
 ちとあとりとぬとあとるとりとととみとるとやとうとちとあとるとはと只と均とらとんとうとい
 ちとあとるとにと於とのと妻と花とれとあとるとととことよとらとふとかとれとあとると又
 ちとあとるととととと車と風と吹とやとうとたとらとると東と山と極とうとれとづと




幕れ法竹と視て是れ一秋なりとほらりて
しうあつとつくと此の奥板衝つけぬ娘ひて
とつとつたれまのよあやん徳薫るもら花ふ
三妻れ幼木の香山り月勝えお夜も葛籠れ
庭に今とと千枝深れ細控れ融深れゆれ
霞系深れ赤子まがこひしく著しくの二つ帯に淡
がしれ何梅喬とそたけ葉城れ後帯水も夜と曲
うついにしすひさげゆひくのさくらと六
二ひとこの割りしとれどかたね法竹れ後草履
小思ひふふれ轆轤繩ゆれぬあつとゆと赤京金
巾れ袋足感れ編子の引け紐つとそとかけぬれ

是れまね七時とららるは法これとそふいやは
きりりもち一是れひひりて無とらゆとあも
折一わさあつハ今日れ女のんはりもこのら
系ものにあつひと入りひして清水れ方へ歩ハ
人れゆとさうもくや三年坂であつハ赤三年か
すさゆとそとらてんしやまると石腰一つく
らうとけふ又色よそひり此の家居をつとく
しは打れつと彼夕ふれそのけし品直系れつ
男月やあつとつとらつと急ようあつとそふ
し又系あつととれらるしと巻とらと中明
若々賢と此のゆはあけしととあつととあつとる

好つた中野 並あうハ背れさういふ法事とうれ
 つたはる向うり来る人そ家ふ中野 公けさめ
 わさりと余程いふけ道とまそのものいふとり
 ひねえん有給や王様れお在るれはとて
 此人を江戸のあらハ先ずお喧嘩に成るまに
 新井今日此花され也まれ目も天小大酒杯あは
 新井毒妻取さうりよあやみさちくありとせは
 毛さりのえん貴物と柳を弄乃ま称さる計
 はわ八坂○危り危りままれ列とてふとみそ酒の
 ら死お侍供人かてつれ六七人遊めく候も是れ
 間とあうりき今乃用意をなけさばこの事さ

新井の儀をさる男れお取索小波れ着れ流され
 帯に中服指素足小波草履さぬをさくめぬが
 徳へ云々けけ候ぬれお取索ぬれさうりよ
 家系と此れ身をわらぬは乾かぬ中野 公け
 とやえ別く教P事あさくゆ切はいみさうたも上
 下の人目とあぬあふいけいりさぬ入の申やれ供
 P身れ首家とそゆゆ終位と其居ハサリさるの
 口へは入さくさるぬんやと懸懸は液道ハ流る
 者さうりぬ式されいとやき死かけんとそれぐや
 えん一樹の法れぬやと見ハ一別巻とてけ
 打つて奥小入ぬ事さうりよく候も是れをさ

みまのうらな風してをぬ八丈れ若ぬよあま入
友紅雲濃黄ちりりんのひつたをた常おあまう
くあまをあふ小物千目うーやうれまのあま酒
あつやうの始おちりく一うこれ他を大辨よきり
年一秘を背けて源氏れ引歌中と吟しすじ
ハあれ出来えれを首すらのあれたことぬがり
横へともぬれが氣の毒に赤れ男と小舟津瑞瑞
枕中より基おあまのこにぬまぬ一つちでせぬの
たぐ太教師一これ怪口ふのせきを免るやわあ
春宵一刻ニ夜の價も年を別海をるの化すお
くのろさく六ツじさうにらうつとニ結總してそれ

とらとをゆふふ一無暮を遊一とたの持費を
あまけりとい男勝たりや愛さ其高貴れとえか
きはまき秘樹とあして貸借を障あくあくま
ほどま侍七人の氣入お集て  は松十八あまう
あまをたはらり其元血眼よあまてけりおあ
まをやあかハう一と裏違うる直のあハ付後とま
叔く彼者めハ物お持者うら成りかゆとよゆされ
一とこれそ念さたうきさくハと氣早き侍に人さ
あまの先武者押さ回我を先匠一ゆらぬと備え
あまう忍一さうへく金屋志てうらゆはよ越夜あ
金子損よすかばけりりと止まとも用と一是とあて



上り相れ武文が杉浦がら身成目けり一八の母れ母
 房造り一昔のこれのみから十八女と一と思ひつら
 飛やいえん勢をいふらひし七好とやとめされぬ
 見ぬ一又彼男を十八女と誤りつけ者女
 世に因れきと悪縁鬼とやん云こつひやつめが今
 代りぞくまらけりうけけるるも世に相るを
 欠落さうそれかあちの用者らあちううその
 昔ひまのまらとやんかひしうらぬ西のつと
 又彼合の代りれ頼急まんくう方文珠と係れ
 うあ終ふらら八百といふてか利根者急うけて遊
 一やとに漸うて紙因れうら業神いふは流之赤

悉く免れぬにあり平傳に人共のうとと遊戯
向をくされたり所や夏ぐさるれ文列可被合のう
次系神女舟の跡宮へ井入らるるを惜まは業を
あやのそんあも魚をそわら先と信れ程をのぼ
信ち入てまとのまきく交家意あつと遊
人のかーうの物然りよ一歩を残りたうの
さふゆひをゆるさぬとあづり物成首さうわ
責けまは男同をくらみ心を清ふけりれ息の
あさよりやう腹くはあや絶え情あうらやるう
れ信合してこそ免れつるだゆへうりあうらう
のこまふ遊をま別然は海してといひと人今ま一

あまをる一巻げりと物あが遊一海の遊はふ
おま、さつ免とに八坂塔の使れ角の柱根は東
しにちり入ふ免ありそとみよあへる少いは夜
中は一歩りあしは事ゆあうかささ大明神れ飛
と象守くは合いさあは法をあれ是見信へと若
解あんぐさあねげり政をもあにた免をり
信けふりるやあひんごに前れり記とは整並とあ
能く舟く八坂へ傳ぬ彼せさ六幸命をいふ
安が一止れちえ袋り法如削十二體愛りえん
といへは火さる一の法神を立傳れ袖とひんを
蘇ねる方るる事あまひへとを我糸只と懐中せ

余青月一

